星を作る工場

作：かわぐち さとし
絵：わんだ

星を作る工場

作：かわぐち さとし
絵：わんだ

～ 小さな惑星の始まり ～

一切の光も届かない静かな暗闇。
ここは宇宙の最果て。

そこに天使がやってきた。

その天使は手にしたランタンに青い明かりを灯し軽く揺らした。

するとランタンから光が零れキラキラと光の粒が舞い上がった。

そして青い耳飾りを外しその手の中へフッと息を吹きかけた。
青と白の光が混ざり合うと暗闇に次々と星の妖精が生まれていった。

「こんにちは。天使さま」

星の妖精たちは幼い子供のような声であいさつをした。
「ああ、よく来てくれたね。お前たちに頼みがある。
ここに惑星を作りその成長を見守って欲しい。」
「私たちで良いのですか！？ありがとうございます」
妖精たちは嬉しそうに答えた。
天使は惑星の設計図を妖精に渡し別れを告げると、
大きな翼をひろげ暗闇の奥へと消えていった。

～ 惑星ジュエリ ～

星の妖精たちによって作られた惑星は回らない、そしてそこから動かない。
代わりに小さな太陽がその星をくるくると回り平らな地上を照らした。

まるで地球人が大昔に考えた「天動説」のような星だった。

太陽の光に照らされ大気のドームは青緑色に美しく輝いた。
星の妖精たちは宝石のように輝くこの星に「ジュエリ」と名前をつけた。
そして、来る日も来る日もせっせとジュエリのお世話をしていった。

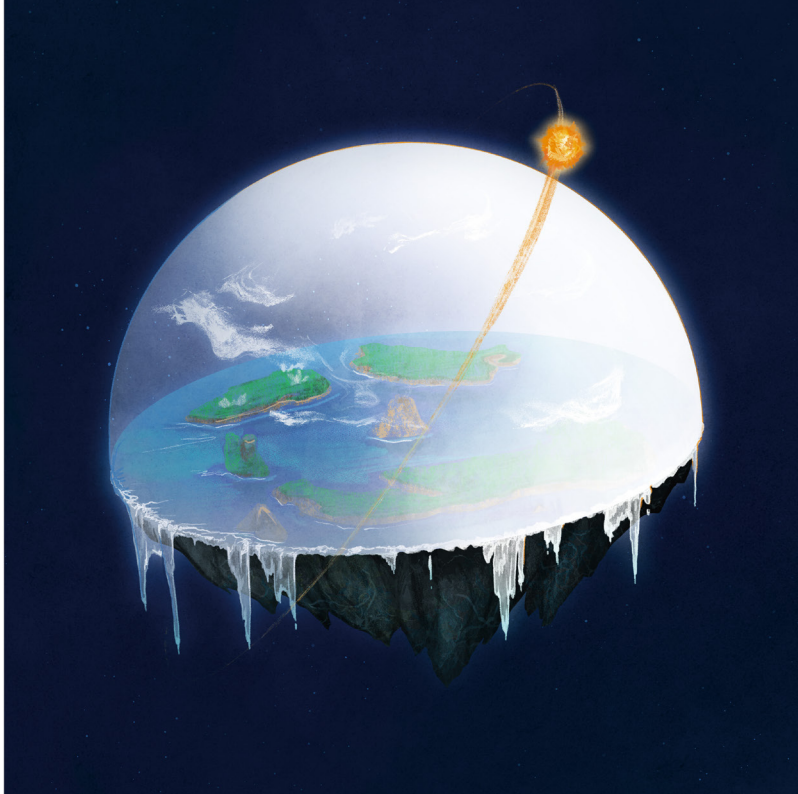
ある日は島や大陸を作り、ある日は水に生命の素と雷を降らせた。

それから何年、何百年、何百万年、何億年経ったでしょうか。
この星に沢山の生き物が誕生しました。

またある日から流星が飛んでくるようになりました。
その流星は遥か彼方から新たな命を運ぶタマゴでした。

流星がこのジュエリに落ちると、新たな生き物となり生活を始めよるようになりました。

異なる環境の星々で育った命が訪れることで生き物の進化は飛躍的に加速し、
やがて育つ文化にも大きく干渉するようになりました。



～ 星の妖精たち ～

ある日のこと。
星の妖精たちはジュエリから離れた宇宙にいました。
大きなトンカチで流れ星の通るレールを修理していました。

トンカン　トンカン

星の妖精たちはとっても働き者。汗を流しながら曲がったレールを叩いていました。

すると、何処からかシクシク、シクシクと悲しい声が聞こえてきました。

小さな光の玉がゆらゆらと揺れながら泣いていたのです。

それに気が付いた星の妖精たちはみんな手を止めると、光の玉に近づき優しく声をかけました。

「ねえ、どうしたの？何で泣いてるの」
「えーん　えーん。迷子になったの。えーん、えーん」
「そっかー、天国はあっちだよ。君は何処から来たの？」

光の玉は惑星ジュエリを指さしました。
「そっか。じゃあ私が案内してあげる。おいで。」
妖精の一人は光の玉を連れて天国へ案内してあげました。

ためしよみ
は
ここまでです